



(歌舞) 一龍齋貞喬演
北富三郎書 (138)

馬鹿々々しい白を切つてゐる。
金「大變な辨天さま、辨天なら
黒辨天さまの方だ」
市「戯なさん辨天さまに白い
の黒のつてそんな區別はねい、
辨天なら辨天だ、それに何が後で
相談して御挨拶をする云ひなす
つたが、私のためにばれ前さんは
阿父さん、何も後でなくとも宜
うございませう」
市兵衛の方は、こで強い所を見
て置かねば不利と思つたらから手
の足を取つては捨じむ、ため
に金右衛門大団り、まづ親類などを
に此方へ来て下さいとの間へ呼
んでどうしたら宜いだらうと相談
するも、「人が向ふは町娘の事だ
金を出して此の場を石めたたらどう

市「さあ斬るなり打つなり勝

手にしる」

さばき出で、イヤ室内には著く

ないが自然聲の仕打が癌に障る

いつ同じ腰に引摺りく

市「さあ斬るなり打つなり勝

手にしる」

さばき出で、イヤ室内には著く

なつて驚に上りざうなる事が心

配してもち、するも此の手傳ひ

として來てゐたは柳橋の小雪とい

ふ妓妓、年頃二十三四、娘さん、

妓妓の方で頻りに働いてゐたが、

此の騒ぎを聞いて驚き

小「ガヤまあ甚い事になつたね」

云はれて市兵衛、變な事ないふ女

ひいき願ひます、さうみ捨たも

んぢやあございませんよ……」

云はれて市兵衛、變な事ないふ女

ひいき願ひます、さうみ捨たも